

(12 頁の追加資料：第 3 テーマ「創造から洪水へ」23.1.25)

聖書講

創世記 5:1-32 は、1-11 章のイスラエル前資料（原初史）にある二つの系図の最初のものである。

3 節には、セツが神にかたどって、とは言われておらず、「アダムにかたどって」、とされている。なぜなら、アダムの像はどこか少し劣ったもの、欠点のあるものだからである（創世記 3 章参照）。

このように人間を神の像とアダムの像との重ね合わせとして見ることは、人間にある二面性を認識するものであり、パウロも同じことを経験している（ローマ 7:15-23 参照）。

エノクの「神と共に歩む」（22 節）は、ノアにも用いられている「ノアは神と共に歩んだ。」（6:9）

この章で最も重要なには、ノアについてレメクが予期している事柄である（29 節）。(1) 期待される助けは、神によって呪われた土地からくる（3:17;4:11 参照）。これは、受肉の信仰を暗示するものであり、救いが呪われて土地からくるという主張は、十字架の死と復活とを暗示する。つまり、助けが呪いの場所から来るのであれば、生命は死の現実から来るのである（ガラテヤ 3:13-14 参照）。

「ノア」という名前は、恐らく、休息を意味するのであろう。つまり、神の御加護の中での平穩ということである。

また、ノアによって約束された慰め（29 節）は、罪の結果起こって来た生きることの定めを逆転することである。それは、既に創世記 1-2 章で確認したように、労働それ自体は人類にとって正当な職務であり、そこで予期されている事柄は、人間の工夫に富んだ思いつきがもとらした悲しむべき状態からの解放である。

それゆえイスラエルは、「我らの手の業」が成し遂げられるように祈りつつも（詩編 90:17）、同時に我々の手の業からの解放もまた祈るのである。

このようにこの章は、創造と希望と人間の罪の現実をつなぎ合わせる。ノアは新しい始まりを握っている。その新しく始まるものの中では、創造の希望は、人間の選択という現実があっても、それによって左右されることがない。

レメクの言葉は良き知らせ（福音）であり、進行中に悲しむべき現実にあえて分岐点を望むものであり、それは神の力のよって人間の形をとって来る。